

〈翻訳〉

## フリードリヒ・リストの 「世界は動く」について(II)\*

### On Friedrich List's "Le monde marche" (II)

オイゲン・ヴェンドラー  
原田哲史 訳

This is the Japanese translation of Eugen Wendler's explanation of Friedrich List's prize essay "Le monde marche". This essay of List's about modern productive powers and transport systems, such as the steam engine and railways, is one of his two prize essays which were written in 1837, in vain, for two prize categories of the "Académie des Sciences Morales et Politiques" in Paris. The full text of „Le monde marche“ had been missing and was discovered in 1983 by Wendler.

This second part of the Japanese translation of the Wendler's explanation includes its fifth to ninth sections.

Tetsushi Harada

JEL : B15, B19

キーワード : フリードリヒ・リスト、生産諸力、蒸気機関、鉄道、道徳科学・政治科学アカデミー

Keywords : Friedrich List, productive powers, steam engine, railway, Académie des Sciences Morales et Politiques

---

\* 本論文(邦訳)の(I)つまり第1節から第4節は、本誌第68巻第3号(605-623頁)に掲載されている。フランス語文に関する疑問点について市川文彦氏からご教示を得た。また中川洋一氏の下訳を参考にした。両者にお礼申し上げたい。ただし翻訳文の一切の責任は訳者にある。——訳者

## 5. ふたつめの懸賞論文の発見

アルトゥール・ゾマーは、ひとつめの懸賞論文を発見した後、当時に可能な限りでふたつめの懸賞論文の痕跡を追った。その際彼は、道徳科学・政治科学アカデミーの 1838 年 6 月 30 日の報告書から、懸賞課題「旧世界と新世界 [ヨーロッパとアメリカ] で現在普及しつつある蒸気力と輸送手段は、経済・市民生活・社会組織ならびに諸国民の国力にどのような影響を与えるか」について 2 論文が提出されていたことが分かった。「我々はふたつの論文原稿を受け取ったのであり、両者をめぐる我々の選択は疑いのないものであった。我々が賞に値すると判断したものは第 1 位として登録してある。」<sup>33)</sup>「もしリストが懸賞論文を作成していたならば、それは——その報告書内ではそれ以上の言及がまったくなされていないが——第 2 位の原稿であるに違いなかった。しかしその原稿は、あらゆる尽力にもかかわらず、これまでフランス学士院の文書保管所において発見されてこなかった。その年に受賞しなかった懸賞論文は登録も整理もされないままであったし、とりあえず一応の報告をせねばならないとすれば、文書保管所を完全に新機構にすることによってのみこの手稿の有無に関して保証つきの回答を与えることができるだろう」<sup>34)</sup>ということであった。

ふたつめの懸賞論文の存在が疑う余地もなく紛れもないものであると確認するなかで、我々は 1983 年 10 月のパリでの研究滞在をフランス学士院での資料収集に当てた。そこで明らかになったことは、その原稿 [リストのふたつめの懸賞論文] は所蔵物を時代順に並べ直した際に見付かっていたがこれまで注目されてこなかった、ということである。

「このコンクールに提出された各論文の一覧」から、「蒸気力と輸送手段」についての懸賞課題には次のふたつの論文が提出されていたことが分かる。

---

33) Zit. aus Sommer, A.: Mitteilung über ein bisher unbekanntes Werk Friedrich Lists, S. 701.

34) ebenda S. 701 f.

- (1) 「蒸気力自体で… またそれでもって終結しつつある… 文明の進歩について」という言葉で始まる表題をもつ、四つ折り判で441 ページの原稿。 2月24日にはデュボン男爵のもとにあったが、既述の日である4月19日にロッシ氏のもとに送られた。
- (2) 「世界は動く」という表題をもつ、二つ折り判で66 ページの原稿。 2月24日にはデュボン男爵のもとにあったが、既述の日である4月19日にロッシ氏のもとに送られた。」

最初の方の論文はコンスタンタン・ペキュールによって書かれており、1838年6月30日にアカデミーの賞が授与された。その論文は「包括的で卓越した」仕方で「鉄道問題を文明・文化・政治のすべての分野で網羅的に体系的連関において取り扱った」<sup>35)</sup> 傑出した作品であった。その作品は1839年に『社会経済学——据付機械・鉄道・蒸気船などへの蒸気力応用の影響下での工業・農業の商取引上の利益について、および文明化一般の利益について』という題名で、「1838年のフランス学士院受賞作品」として2巻本で出版された。

第2位の論文の表紙には「世界は動く *Le monde marche*」という表題と懸賞課題の文言とが記されている。

懸賞課題への解答としてフランスの複数の学術アカデミーに提出されるすべての論文は、原則として匿名で提出された。発送者は封印された手紙のなかでその著者であることを表明している。アカデミーの規則によれば、そうした発送者の手紙は、作品が受賞に値すると考えられた場合にのみ開封することが許された。数年後によくこの規則は厳しくは適用されなくなる。それゆえ第2位の論文の著者が誰であるかは、貼付の手紙がいま初めて開封されたことによって、疑いなく確認できるのである。

アカデミーの印章が押された発送者の手紙の封筒のうえには、「第2位――

35) Sommer, A.: Mitteilung ..., S. 702.

1837 年 12 月 31 日「世界は動く」と書かれているのが読み取れる。封筒の内側には、次のように書かれている。

世界は動く  
著者フレデリック [フリードリヒ]・リスト  
駐ライプツィヒ  
アメリカ合衆国領事  
— — —  
パリ  
ヴィヴィエンヌ通り 14 番地、ホテル・ヴィヴィエンヌ

そこには、最初の懸賞論文の発送者の手紙を開いたときに見られたのと同様の筆跡で、同様の執筆者情報が記されている。ここでもまた、リストがその頃国立図書館の表玄関の真向かいのヴィヴィエンヌ通り 14 番地に住んでいたことが分かる。

この懸賞論文は 1983 年 10 月 25 日に発見されたのであり、1983 年 11 月 5・6 日の『ロイトリンガー・ゲネラル・アンツァイガー』紙において初めて報じられた<sup>36)</sup>。

## 6. 論文の記述状態

表紙と折りたたまれた発送者の手紙とを経てその論文が出てくるのであるが、それは次の諸部分から構成されている。

— 執筆者が論文の状態について詫びた、綴じてない 1 枚の紙。執筆者には完全なものとして清書するだけの時間がなかったので、ここに提出するものは写し手による誤記も含まれているが、執筆者は論文を締切りに間に合う

---

36) Wndler, E.: „Die Welt bewegt sich“; siehe auch dergl.: Leben und Wirken von Friedrich List während seines Exils in der Schweiz und sein Meinungsbild über die Eidgenossenschaft, S. 13.

ように学士院に提出したため、そうした誤記を訂正することができなかった、という内容が書かれている。

- 序文の書かれた、両面に記されているが通し番号のない紙。
- 18の章に分かたれた33枚の両面記載の紙——ただし24ページめの裏面は例外。

各ページは、お詫びのページを除いて、それぞれ右半分を黒インクで書く体裁がとられている。ひとつめの懸賞論文とは異なり、糸綴じで結わえられた各ページの紙の質は均一である。

ふたつめの懸賞論文の総量は、それよりも全体として多様かつ極めて密に記述されている165ページの「政治経済学の自然的体系」[リストのひとつめの懸賞論文]の原稿と比べると、はるかに少ない。このことから、このふたつめの懸賞論文の分量に関してアルトゥール・ゾマーが推測した「リストが6週間で、既発見の論文に加えてもうひとつの作品も同じ独創性をもって書き、かつ翻訳したということは」不可能であろうということが<sup>37)</sup>、確認されるのである。ただ、この論文の質に関しては、ゾマーはまだなんら言及するすべもなかった。

原稿の筆跡を確認しようとする、アルトゥール・ゾマーとエトガー・ザリーンが「政治経済学の自然的体系」に関して困惑したのと同じ問題に直面する。ここでも、手書きによって書き直された3つのパターンが見分けられる。ただし、ここでは——パターンの並び方が異なっているため——ゾマーやザリーンの仕方ではなく、数字ではなくアルファベットでそれぞれのパターン部分を示したい。そうすると、諸部分は次のようになる。

表紙とお詫び	—— 手稿パターン B
序文と 1~14 ページ	—— 手稿パターン A
15~30 ページ	—— 手稿パターン B
31~33 ページ	—— 手稿パターン C

手稿パターン A は、よく知られたフリードリヒ・リストの筆跡を示して

37) Sommer, A.: Mitteilung ..., S. 701.

いる。渦巻き模様のようにもあり拙くもある手稿パターン B は、リストの娘エミーリエの手による。手稿パターン C は、「政治経済学の自然的体系」での分かりにくい「書き手 II」のケースと同じ謎を投げかけるものであるが、これについては、我々もゾマーやザリーンと同じく「全体の筆致はリストのタッチと似通っている。…しかし個々の文字の形はリストの普通の書き方とは極めて異なる…」<sup>38)</sup>と判断する。エミーリエの手で書かれた「お詫び」では、ある「写し手」の存在が言われているのだが、「第 3 者の共同執筆はたぶんなかっただろうし、いやまったく不可能だった」<sup>39)</sup>と思われる。したがって我々は、手稿パターン C も同様にリストの手によると考えることから出発する。ただ、最後のふたつの章についてはエミーリエが書き写した可能性もある。

手稿パターン A と手稿パターン B では数えるほどしか手直しされていないが、論文末尾の数ページは頻繁に手直しされている。このことは、彼らが論文をもう終わらせないといけないという強い時間的プレッシャーを感じていたことを明示するものである。

## 7. 言語表現や翻訳における問題

もちろん文法上の誤りが見られるが、それも論文のすべての部分にあるのである。その他、句読点やアクセントも間違っている。このような不備については、極端な時間的プレッシャーということで謝っていてもいるし、「写し手」のせいにしてもある。実際のところ、こうした不備は何よりもリストがフランス語が苦手だったことに起因しうる。

1822 年ストラスブールで数カ月おくれた最初の亡命生活において<sup>40)</sup>、リストは初めてフランス語と取り組んだ。彼は、元弁護士で当時翻訳家であったカール・フラッハスラントによって身元が引き受けられて、フランス語の基礎文法にも習熟するようになった。わずかの時間でフランス語の専門書を読みこなせるようになり、翻訳までしようとしていたことからすれば、リストが近代

38) Salin, E. und A. Sommer: Friedrich List: Das natürliche System ..., S. 29.

39) Ebendort, S. 30.

40) Vgl. Wendler, E.: Leben und Wirken von Friedrich List...

の諸言語についての才能をもっていたことは明らかである。1824年3月初めのある手紙では、何よりもラファイエット侯爵のような人までが、リストが非常に精確にフランス語を書いていることを証明している<sup>41)</sup>。

1824年4月・5月および1831年の春・秋といった短期のパリ滞在から、またいくつもの学術論稿や文献研究から察するとすれば、リストがふたつの懸賞論文を書くために自身のフランス語力を新たに示さなければならないまでの間に、10年以上が経過していた。彼にとってこのことは実に困難に思われたに違いないことや、パリでの3年間の亡命生活のあとでさえフランス語がままならなかったことは、エミーリエの注釈からうかがえる。というのも彼女は、ルードヴィヒ・ホイサーに父のことをこう書いているからである。「父はいつも語学の勉強を非常に重視していて、若い時にそのような機会がもうなかったことを悔やんでいました。英語については、父はアメリカへ行く意図をもったときに初めて学び始めたにもかかわらず完璧にマスターしましたし、それどころか非常に正確な英語を書いていました。父にはフランス語の方がはるかに難しかったのです。たしかに父は非の打ちどころなくフランス語を理解して話しましたが、流暢なことなど一度もなかったし、自分の考えを表現するときはいつものどかしさを覚えているようでした。父がパリを故郷のように感じる事がまったくなかったのも、それも原因となっていたのかな、と私は思っています。」<sup>42)</sup>。

ギュンター・ファビウンケは「自然的体系」の翻訳に際して、リストのフランス語表現能力についてこう評価している。彼の「フランス語は、厳密に言えばドイツ・フランス語であり、言い換えれば、フランスの言葉で飾り立てて——十分に修得できていないフランス語文法のなかに入れ込むことによって——極端に変形させられたドイツ語なのである。しかもそれは、今や100年以上古いのみならず、何といてもリストによって特有の個性的な言語形成の仕方書かれたドイツ語なのである」<sup>43)</sup>。

41) Vgl. Lafayette, M. de.: Brief an F. List, S. 283.

42) zit. aus Salin, E., und A. Sommer: Friedrich List..., S. 146f.

43) Fabiunke, G.: Friedrich List – Das Natürliche System der Politischen Ökonomie, S. CVII.

エミーリエがパリでの寄宿生活ゆえに「基礎フランス語」<sup>44)</sup>は流暢に使うことができ、ふたつの懸賞論文の翻訳に際して献身的に手伝ったとしても、両論文は「ひとりのフランス語に堪能なドイツ人によって書かれたというよりも、フランス語をほとんど知らない著者によってフランス語に翻訳されてしまった」<sup>45)</sup>ものである。それに由来する意味上・構文上の欠陥は、エトガー・ザリー、アルトゥール・ゾマー、ギュンター・ファビウンケ、ウィリアム・O・ヘンダーソンが「政治経済学の自然的体系」をドイツ語や英語に翻訳する際に経験したのと同様の深刻な諸問題を、我々に突きつけるのである。

我々の翻訳は、ファビウンケの原則によって行った。彼が躊躇しなかったのは「リストの叙述が充分でなかったり厳密でなかったりする場合や、リスト自身のいつもの言語用法から逸脱した文章になっている場合、そうした叙述に対処するときにはどんな場合でもドイツ語によるそれに相応する記述を探っていくということである。たしかに、こうすることで、リストの典型的な表現方法と、言語で表現される彼の作品の時代的特性とは、リスト自身がフランス語で提出した原文を直接的・逐語的に硬く翻訳するよりも、分かりやすくなったように思われる」<sup>46)</sup>。ファビウンケが「まず出発点とする考え方は、自分の最重要課題は、実質的に異論の余地のないように、今日の読者にも完全に理解しうるように、この作品に据えられたリストの… 見解を再現することにある、ということである。それゆえ自分 [ファビウンケ] は、フランス語で書かれた文章に込められた… 事柄の内容そのものに強く依拠するのであって、その文章を文章構造・文法に執着して盲目的に受けとるようなことはしないのである」<sup>47)</sup>。

我々は同様のやり方で、ふたつめの懸賞論文の原文を読みやすく分かりやすい形で翻訳するように努めた。その際、可能な限りオリジナルの字句やリストのドイツ語表現に依拠するようにした。不明瞭であったり誤解が生じる恐れがあったりした場合には、いくらか自由に翻訳するようにした。そうすること

---

44) List, F.: Brief an seine Frau Karoline vom 22. 11. 1837, Werke VIII, S. 499.

45) Salin, E., und A. Sommer, S. 147.

46) Fabiunke, G., S. CVIII.

47) Fabiunke, G., S. CVIII.



で、内容において忠実であるのみならず、今日の原文理解にもふさわしいものとなっていると考えている。

## 8. 懸賞課題における基本方針に即した課題設定

複数のパリのアカデミーが出すどのような懸賞課題も、「基本方針」と題された、課題についての説明書きが付いており、そのなかで、望ましい論文の問題設定・目標設定について詳しく説明されている。ここで論じている懸賞課題とそれに関する「基本方針」とは、アカデミーの著名な会員であり技術者・経済学者でもあったシャルル・デュボンによって作成された。そのフランス語の文章はすでにアルトゥール・ゾマーによって公表されているので<sup>48)</sup>、ここではドイツ語訳のみを示す。

### 基本方針

「経済学・統計学の部門の名において、シャルル・デュボン男爵は以下の課題設定を書いたのであり、それはアカデミーによって承認された。

現実に関与する新しい力を人間精神が発見するときはいつでも、そうした着想は現実に即したものでなければならない。ある高度な秩序を基盤にしてはあがるが社会構成体はさまざまな革命を通じて段階的に発展するものであって、しかもそうした革命はまず産業・学術の領域で始まり、最後に——諸国民の様相を変えるような——政治的な革命へと至るものなのである。

火薬の混合・爆発という形態で様々な爆発力 Dampfkräfte が初めて生み出されたとき、それによって中世の社会構造は破壊された。そのためのみではないとはいえ、軍事的な戦争遂行のための物的システムは変わってしまったし、さらに装備の優劣による人々の間の不平等も失われて、勇気と銃器とによって戦うようになった。以前は物的に扱われる様々な武器が不平等に与えられて、社会の様々な勢力も不平等であったが、そうした革命によって大量殺戮手段による戦争へと至ったのであり、それとともに大衆の市民的な自由も生じてきたので

48) Vgl. Sommer, A.: Mitteilung, S. 708 ff.

ある。

爆発力を破壊のために用いた後、今や——そこから類推して——この力を生産に応用することが求められている。人類がこの使用形態をより重視するようになって、それが破壊への使用にとって代わるまでに、700 年もかかったのである。

しかし、蒸気力 *Dampfkraft* が人間の仕事を支えるために使用されるとき、それは東洋と西洋の諸国民の間での経済状態を変えたのである。3000 年前から東洋の諸国民よりも劣っていた西洋の諸国民は、蒸気力によって、繊維産業の分野における最も困難な仕事を行ううえでの優位を勝ち取ることができた。インドがヨーロッパに向けて供給していた極めて繊細で高価な織物を、今やヨーロッパがインドに向けて供給している。

西洋は、征服した東洋から取り寄せている生活必需品・香料・原料を、もはや貨幣ではなく蒸気力で支払っているようなものである。

18 世紀の間、蒸気による生産力は、据付けた動かない機械での様々な作業に限って用いられた。

しかし、19 世紀初頭以来、人々はこの蒸気力を輸送機械に応用するという課題をクリアしたのであって、輸送機械は放出される蒸気力から動き出すのであり、そうして貨物・車・船舶は陸路や水路を進むことが可能となっている。

安定した路床の上に建造される新型の車両は、新しい原理に基づいて建造された軌道を必要とするのであるが、それは、車輪の滑りを最小限にするために傾斜を弱くした鉄製の線路であり、機関車や牽引される貨物の重量に耐えうるものでなければならない。

こうした新しい組み合わせによって、人類はこれまで思いもよらなかった輸送力を生み出したのである。

(ここにイギリスの鉄道に関するいくつかの報告が続く [ヴェンドラーの補足])

北米の社会組織は、蒸気生産力の新たな応用の帰結である途方もない変容を立証している。… 何世代にもわたって非居住地のままであったところに新しい国々が生成してきているのであるが、蒸気動力が投げられることのなかったそれらの国々は大いなるアメリカ連合 *die große amerikanische Union* に編

入されていく…。我々が提示する課題は意義深い。ここでの課題設定で描いた領域に制限するつもりは毛頭ない。論文が扱う範囲は、懸賞課題への応募者が自由に決定・設定するのに委ねることになっているから、ここでは彼らの観察や考察こそが最も重要な問題提起を見出すのであり、その問題提起とは人間・職業との関連で道徳科学・政治科学のすべての領域に言及するようなものなのである。

応募論文は、1837年12月31日までに秘書課に提出されなければならない。この期限でもって終了とする。」<sup>49)</sup>

## 9. 懸賞審査委員会

懸賞論文が提出された後、道徳科学・政治科学アカデミーの懸賞審査委員会のメンバーとして審査にあたったのは以下の人士である<sup>50)</sup>。

- シャルル・モーリス・ド・タレーラン公爵 (1754～1838年)
- ピエール・シャルル・フランソワーズ・ド・デュボン男爵 (1784～1873年)
- ペルグリノ・ロドヴィコ・エデュアルド・コント・ド・ロッシ (1787～1848年)
- アレクサンドル・ルイ・コント・ド・ラ・ボード (1774～1842年)
- ルイ・ルネ・ヴィラメ (1782～1863年)

しかし、すべての審査委員が決定に関与したかどうか、またどのように裁定がなされたのかについても、確信をもって断定することはできない。「種々のアカデミーの委員会での討議内容は文書では残さないものとなっており、学士院の規則により秘匿されているのである」<sup>51)</sup>。とはいえ、この懸賞課題についてはデュボンとロッシだけが審査員として作業をしたということは、かなりの可能性で言えるのである。「このコンクールに提出された各論文の一覧」では、第1位と第2位の論文の転送に関する「M氏による論文提出者についての表示」欄において、「2月24日デュボン男爵が手にし、4月19日に戻され、

49) Französicher Text siehe Sommer, A.: Mitteilung, S. 708-710.

50) Ebenda S. 712.

51) Ebenda S. 711.

その日にロッシ氏に送られた」とメモされている。1838 年 5 月 17 日に亡くなる 84 歳のタレーラン公に裁定のための意見を求めるようなことは、まずありえなかったであろう。ラ・ボードやヴィラメの名も同じく「一覧」に記されていないので、関与しなかったと考えられる。したがって我々は、シャルル・デュボンとペルグリノ・ロッシのみが審査に携わったと特定するのであり、しかも、両者はこの懸賞課題のみならず「自然的体系」に関しても裁定者であったのだと考える。

シャルル・デュボンは 1805 年にアントワープ港の建設に寄与したが、1808 年に思い立ってコルフ [ギリシャ] に赴き、イオニア・アカデミーの秘書官となって、デモステネスの弁舌を翻訳するとともに、幾何学の諸研究を編纂して出版した。その後フランスに戻ってトゥーロンで造船を学び、1818 年には科学アカデミーの会員となるとともに、自身が設立した国立工芸学校の応用力学の教員にもなった。1828 年には国民議会議員となり、1834 年には短期間ではあったが海軍大臣を務め、1837 年に貴族に叙された。

「シャルル・デュボンは、リストの文筆活動や政治姿勢に絶えざる影響を与えた数少ない人たちのひとりである。やはり、とくにそのマンツーマンでの生きた影響関係と、リストの両懸賞論文でのデュボンからの影響とを考慮に入れるならば、この学者こそリストの生涯と仕事に最も近い位置にいたと主張したとしても、なんら的是はずれではない。リストは攻めの姿勢でもって情熱的に一生涯の課題に取り組む者であったが、デュボンの作品を知ってからは、死ぬまでこの偉大なフランス人を模範と見なし、彼に支えられ・励まされ・認められていると感じていた、といった意味においてとりわけそう言えるのである。」<sup>52)</sup>

1827 年にデュボンは、経済学に関する 2 巻本の著者『フランスの生産諸力・商業諸力』をパリで出版した。この作品とリストが同年に出版した『アメリカ経済学概要』との間には、両者ともその両作品において生産諸力に関する自らのテーゼを発展させたという限りにおいて、内容的に緊密な結び付きがある。その際、両者それぞれの独自性があるとはいえ類似の思考が並行的に展開され

---

52) Salin, E. und A. Sommer, S. 56.

て出版されていた、という点が重要である。さらには、リストの「生産諸力の理論」は、デュボンの「生産諸力」とは異なった論理・概念の段階にある。「生産諸力の理論」という規定もそれに基づく体系化も、さらにはそれに内容的に対置される「価値の理論」も、リストがオリジナルに提起したものである。それはそうなのであるが、W.O. ヘンダーソンが、リストは「デュボンのことを、イギリス古典派経済学者たちとそのフランスにおける追従者たちによる自由貿易・自由放任主義の観念を激しく攻撃する際の強い味方だと見なしていた。デュボンとリストは、J.B. セーの自由主義の経済学説は誤っており、あらゆる可能な機会に論駁すべきだということでご合意していた」<sup>53)</sup>と述べているのには、賛成できるのである。

道徳科学・政治科学アカデミー懸賞審査委員会のもうひとりのメンバーであるペルグリノ・ロドヴィコ・エデュアルド・ロッシ伯爵は、イタリアの刑法学教師・経済学者として1812年にポローニャ大学で、1819年にはジュネーヴ大学で教授の職を得た。1834年に彼はパリのコレージュ・ド・フランスに、また1838年には道徳科学・政治科学アカデミーのメンバーとして招聘された。1840年には枢密顧問官の地位を得て、1845年には駐ローマの臨時公使に、1846年に駐ヴァチカンのフランス大使に、1848年には教皇内閣の大臣を務めたが、同年、政治的な暗殺の犠牲となった。

リストはつねにシャルル・デュボンに特別な敬意を払っているが、「フランスにおける経済学の最初の権威」<sup>54)</sup>であるロッシに対しては、ためらわず執拗な批判を行っていてもいる。彼が『政治経済学の国民的体系』の前文で非難しているのは、ロッシに対してである。すなわち「国家諸学全般とりわけ政治経済学の多種多様な諸領域の発展に重要な貢献をした人、ロッシ氏であるが、この人はイタリアやスイスの諸都市で教養を身に付けたのであるが、これらの諸都市では産業や商業について国民的な尺度・関係において認識・判断するのを学ぶことは不可能であるから、一般的な自由貿易の思想の実現を希求するしかないであって、この世で何の慰めも見出せない人たちがあつた世での歓喜に期待す

53) Henderson, W. O. : Friedrich List and the French Protectionists, S. 271.

54) List, F.: Richelot über Rossis System der politischen Ökonomie..., S. 468.

のようなものなのである。そうしたロッシ氏は「[まだ世界主義の原理をなんら疑っていなかったのであり]、歴史がこの事柄においてはアダム・スミスの場合とは違った説明を与えることができるという考えには至っていなかったのである。」<sup>55)</sup>

「そのフランス学派の周知の大家は…1837年に私たちの審査委員のひとりであったということであり、我々の彼との個人的な会話においては政治経済学における「国民性」や「将来」について何も知らうとしない人であったということである。ロッシ氏は、ご存知のように非常に洞察力が鋭いだけでなく、非常に賢い学者であるから、彼のような人は、我々の懸賞応募論文を読むや否や、自由貿易学派が——その閉鎖的と言えるほどに一系列をなして——「我利我利亡者の工場主や独占業者」と衝突するに至ることはあるとしても生死を賭けて全フランス国民と格闘するまでには至らないといったことは、すぐに分かったにちがいない…。そうした理論家のお偉方は、世界・人間の諸関係について——そんなものはないといった——考えを示す特権なるものを要求するのみならず、現実生活のための結論と国民全体のための原則とをそこから引き出したくてたまらないのである。そのようにして彼らが思い描くことができるであろうものは、貴金属もなく地軸を回りにもしない世界、あるいは胃袋も財布もない人間…、純粋に道徳的な人間存在——つまり衣服・住居・飲食・交遊はどうでもよくて極めて高潔な動機により行動する人々——である。…結局のところ、ロッシ氏が経済理論の名のもとに目先の国民的利益の擁護者たちと取り結んでしまった降伏条約なるものは、こちらでもドイツのためにと望んでしまうような可能性のある事柄の全体なのである。我々の実践的な見地に立てば<sup>56)</sup>、学派がそのポエジーを高貴なものとして保持するかどうかとか、学派がその役に立たない玩具を捨て去るように強えられるかどうかとかいったこ

55) List, F.: Das Nationale System der Politischen Ökonomie, S. 19. [この引用の訳文については小林昇訳『経済学の国民的体系』岩波書店、1970年、16頁を参照した。ただし訳文はすべて同じではない。なおこの引用文中における角括弧による補足はヴェンドラーが引用し忘れた箇所である。]

56) Vgl. Wendler, E.: Gedanken von Friedrich List zur Verbindung von Theorie und Praxis in der Wirtschaftswissenschaft, S. 30-32.

とは、どうでもいいのである。我々自身は、自分たちの体系において——コスモポリタン経済学という適正な名称のもとにであるが——その学派に一定の理論的な余地を認めた。コスモポリタン経済学がそれでもって満足するとき、ロッシ氏の関与するコスモポリタン経済学も応用的・実践的な経済学に対して、我々がコスモポリタン経済学のために要請するような場を認めるであろうし、そうなれば、我々と学派の間の和平・停戦の締結を邪魔するものは何もない…。さらに、ただただ願うことは、権力の源泉にいる国民経済学者たちが経済学の詩と散文を取り違えるようなことを二度と思い付かないようにということであり、空気ポンプのもとで蛙を扱うような具合に経済学の実験をすることができると思えるようなことを二度と思い付かないことである。<sup>57)</sup>

したがって、フリードリヒ・リストは自分の「自然的体系」がアカデミーの賞を与えられず単に「優れた作品」との評価にとどまった責任がペルグリノ・ロッシにある、と考えた。「彼〔リスト〕はデュポンに対して失望を理由に非難したわけではなかった」<sup>58)</sup>。ひとつめの懸賞論文に関するこうした〔ロッシへの〕非難が的を射たものかどうかは、ここでは置いておこう。ふたつめの懸賞論文の審査の場では、いずれにせよ彼の作品はもちこたえられなかったのである。この場合は——より詳細に証明することも可能であるが——分量からしても、内容や言語的な優位からしても、コンスタンタン・ペキュールの論文こそ受賞に値したからである。

### 参考文献

[この (II) の脚注で記されている文献をオリジナル末尾の文献一覧から抽出した]

Fabiunke, G.: Friedrich List, Das Natürliche System der Politischen Ökonomie, Berlin 1961.

Henderson, W. O.: Friedrich List and the French Protectionists, in: Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, Band 138, H. 2, 1982, S. 262-275.

57) List, F. : Richelot über Rossis System der politischen Ökonomie, S. 468-471.

58) Henderson, W. O.: Friedrich List and the French Protectionists, S. 272.

- Lafayette, M. de: Brief an F. List von Anfang März 1824, Werke VIII, S. 283.
- List, F.: Schriften/Reden/Briefe, Band I-X, hrsg. von Erwin v. Beckerath, Karl Goeser, Friedrich Lenz, William Notz, Edgar Salin, Arthur Sommer, Berlin 1928-1935, abgekürzt: Werke.
- List, F.: Das Natürliche System der Politischen Ökonomie, Werke IV.
- List, F.: Richelot über Rossis System der politischen Ökonomie und über Lists Nationales System der politischen Ökonomie, Werke VI, S. 465-471.
- List, F.: Briefe an seine Frau Karoline, Werke VIII, hier S. 497-503.
- Salin, E. und A. Sommer: Kommentar zu Friedrich List – Das Natürliche System der Politischen Ökonomie, Werke IV.
- Sommer, A.: Mitteilung über ein bisher unbekanntes Werk Friedrich Lists, in: Schmollers Jahrbuch, Band 50, 1926, S. 687-718.
- Wendler, E.: Gedanken von Friedrich List zur Verbindung von Theorie und Praxis in der Wirtschaftswissenschaft, in: TEX-Mitteilungen rund um's Technikum, Heft 29, Reutlingen–Stuttgart 1981, S. 30-32.
- Wendler, W.: »Die Welt bewegt sich«: Friedrich Lists verschollene Abhandlung in Paris entdeckt, in: Reutlinger General-Anzeiger vom 5./6. 11. 1983, S. 11.
- Wendler, E.: Leben und Wirken von Friedrich List während seines Exils in der Schweiz und sein Meinungsbild über die Eidgenossenschaft, Diss. Konstanz 1984.